日本胸部外科学会

徳洲会グループから27演題

さらなる治療成績の向上を目指し研鑽

第79回日本胸部外科学会定期学術集会が10月20日から3日間、京都市で開かれた。テーマは「胸部外科の新たな時代へ～Over the Horizon～」。徳洲会グループはパネルディスカッションやサージカルフォーラム、一般口演などで計27演題を発表した。一部を紹介する。


リアルワールドデータ活用しMIDCABの連続263例について発表する中村・院長代行


感染対策の確立を受けCABGの術式を検討した結果を発表する上田副院長


先天的二尖弁の患者さんへの胸腔鏡下弁形成術を発表する伊藤・統括部長


大動脈解離のFET後に行う予防的TEVARについて発表する川上部長

千葉西総合病院の中村喜次・院長代行（徳洲会心臓血管外科部会長）は、「CABGにおけるリアルワールドと治療戦略の最適化」をテーマとするパネルディスカッションで「リアルワールドプラクティスにおけるMIDCABの役割と戦略」と題し発表した。

冠動脈バイパス術（CABG）は、詰まった心臓の血管の先に別の血管（グラフト）をつなぎ、血流の迂回路をつくる手術。MIDCABは、胸骨（胸の中央の骨）を切らず、左胸の小さな切開から行う低侵襲のCABGで、胸の内側を走る左内胸動脈を心臓の前面を走る重要な冠動脈である左前下行枝（LAD）につなぐ。

中村・院長代行は「実臨床では、LAD以外の血管にも病変がある症例が多い。にもかかわらず、国内ではMIDCABのまとまった連続症例の報告がほとんどありません」と指摘。

自院の連続263例を、LADだけに病変がある群、LAD以外にも軽度の病変がある群、カテーテル治療（PCI）を組み合わせたハイブリッド治療の群に分け、生存率や再治療などの成績を比べた。LADだけに病変がある群の7年生存率は約93%で、「同年代の日本人の生存率と比べても引けを取りません。LADの病変に対するMIDCABは、第一選択となる治療です」と強調した。

一方、ハイブリッド治療の群では、PCIで治療した部位の再治療が多かったことを示し、「胸骨正中切開（胸骨を縦に切開する方法）を避けたい高リスクの患者さんが約3割含まれており、その背景を反映した結果です」と説明。「はっきりとした多枝病変であれば、胸骨正中切開によるCABGが依然として標準治療です」と補足した。

同院の演題数は11演題とグループ全体の半数近くを占めた。

サージカルフォーラムでは、札幌東徳洲会病院の上田高士副院長が「感染コントロールチームの確立と胸骨固定プレート登場によるCABGアプローチの変遷」と題し発表。

複数の血管に病変がある患者さんへのCABGについて、自院では心臓を止めずに胸骨正中切開で行うOPCABを実施していたが、胸骨の感染リスクから、2017年に胸骨を切らない小切開のMICS-CABGも開始。その後、感染対策チームの活動と胸骨固定プレートの導入で、胸骨感染リスクがほぼなくなったことから、両術式を比較した。

MICS-CABG60例とOPCAB48例を比べたところ、MICS群は出血量が少なかったものの、手術時間は長く、グラフトの開存率（つないだ血管が詰まらずに保たれている割合）は有意に低かった。

上田副院長は、CABGでは基本的に「OPCABを第一選択」とし、「MICS-CABGは条件の合う症例に厳選して行うべきです」と結論付けた。

実臨床で得た最新知見を発信

一般演題で、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の伊藤敏明・心臓血管外科統括部長は「若年者先天性二尖弁に対する胸腔鏡下弁形成術」をテーマに発表。

先天性二尖弁は、通常3枚ある大動脈弁の弁尖（弁の膜）が生まれつき2枚しかない病気。血液が逆流しやすく、逆流が進むと手術で人工弁に置き換えるのが標準的な治療だ。伊藤・統括部長は、二尖弁の患者さんの約4割が80歳までに大動脈弁狭窄症（弁が硬くなり開きにくくなる病気）を発症するという海外の調査を示し、手術で逆流を抑えても、将来は狭窄症で再手術が必要になる可能性が高い点を指摘した。

同院では胸腔鏡下で、弁の付け根などは縫い縮めず、弁尖の形を整える形成術を行っていることを説明し、治療成績などを提示した。伊藤・統括部長は「50～60代で大口径の生体弁（動物の組織でつくった人工弁）に容易に置き換えられる状態にしておくことで、患者さんの生涯を見据えた治療が可能です」と語気を強めた。同院は計4演題を発表。

宇治徳洲会病院（京都府）の川上敦司・心臓血管外科部長は「大動脈解離に対するFrozen Elephant Trunk後preemptive TEVARの有用性に関する検討」と題し発表した。

大動脈解離は大動脈の壁が裂ける病気。治療には、薬で血圧を下げる方法と手術があり、病状に応じて選ぶ。手術は、主に胸を開いて大動脈を人工血管に置き換える方法と、カテーテルでステントグラフト（金属の骨組みが付いた人工血管）を入れるTEVARのふたつがある。

FET（オープンステントグラフト法）は前者のひとつで、人工血管とともにステントグラフトを下流の大動脈に挿し込む。同院ではFET後、一定の条件を満たした患者さんに、予防的にTEVARを追加している。川上部長は、その取り組みを検証。予防的TEVARを行った17例では大動脈の拡大や破裂、再治療などが起こらなかったのに対し、行わなかった9例では3例に起こり、有意な差があったと報告。

川上部長は「今回の結果をふまえ、当院は積極的に行う方針です」と継続する意向を示した。

同院も計4演題を発表した。

八尾徳洲会総合病院（大阪府）と福岡徳洲会病院が各3演題、葉山ハートセンター（神奈川県）が1演題を発表した。

徳洲会ホスピタリティスペース 会期中100人訪れ盛況を博す


植栽をふんだんに配置した休憩スペースに約100人が来場

徳洲会グループは第79回日本胸部外科学会定期学術集会で、ホスピタリティスペースを開設、学会参加者は休憩しながら、徳洲会グループの活動について理解を深めた。会期中に約100人が訪れ、盛況を博していた。

同スペースには、徳洲会グループの職員が常駐し、パネルや動画、パンフレットなどを用いて徳洲会の活動を説明。全国に展開する病院群をはじめ、手術支援ロボットの導入状況、国際医療支援、国内外で災害医療支援活動にあたるNPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）など、多岐にわたる取り組みを紹介した。

スペースを訪れた外部の医師からは「徳洲会の取り組みに対する見方が変わった」、「離島医療に貢献したい」など、さまざまな声が寄せられ、入職を希望する声も聞かれた。

徳洲会心臓血管外科部会

より高度な治療技術を!

グループ外から優秀な人材誘引も


貴重な情報を共有し交流を深めるメンバーら（前列左から6番目が大橋・副理事長）

徳洲会心臓血管外科部会は10月21日、京都市で第11回会合を開いた。第79回日本胸部外科学会定期学術集会に合わせた。

当日は医師30人が参集。冒頭、大橋壯樹・医療法人徳洲会（医徳）副理事長が挨拶し、「第1回から参加していますが、以前と比べグループの心臓血管外科の存在感は格段に増しました」と強調。

グループの海外展開に触れ、インドネシアで来年4月にフルオープンを予定している「ハラパンキタ・徳洲会循環器病センター」を紹介したり、米国のメイヨー・クリニックとの合同カンファレンスを来年1月に予定していることを報告したりした。こうしたグループ外との交流を通じて、「より高度な治療の技術も磨いてほしい」と締めくくった。

次いで、部会長を務める千葉西総合病院の中村喜次・院長代行兼心臓血管外科主任部長が挨拶。「グループ全体の学術的な立ち位置を把握することが大切です」と唱えた。その後、心臓血管外科領域のグループの学術活動に関する調査結果を報告。昨年1年間で心臓血管外科の論文発表は30編、学会発表は113演題だった。うち国際学会は16演題で、グループの全診療科で最多。中村部会長は「誇るべき数字です」と称賛した。

そのほか、名古屋徳洲会総合病院で検証中のAIを使った新たな仕組みも紹介。NCD（全国の手術症例を登録するデータベース）への入力を自動化するもので、年度内の本格運用を目指している。

千葉西病院の中山泰介・心臓血管外科副部長は、国際学会の渡航支援を提案。大橋・副理事長は米国胸部外科学会（AATS）、米国胸部外科学会（STS）、欧州心臓・胸部外科学会（EACTS）の国際主要3学会での発表について、費用の負担割合をグループで統一する可能性を示唆し、「グループ外から優秀な人材が集まるようにしたい」と力を込めた。

田中・武蔵野病院副院長がFMラジオに出演

4月発足の呼吸器センターなどPR

武蔵野徳洲会病院（東京都）の田中良太・副院長兼呼吸器センター長は9月9日、地元のFMラジオ局「FM西東京」（84.2MHz）の番組『なごえり フォークソング・ステーション』に出演し、今年4月の着任と同時に発足した呼吸器センターなどをピーアールした。


生放送の出演を終え「なごえり」のふたりに囲まれて笑顔の田中副院長（中央）

同番組はフォーク歌手の和さんとMCの髙橋絵里さんによる音楽ユニット「なごえり」が司会を務め、毎週水曜午後5～7時に生放送の情報・音楽プログラム番組。西武新宿線田無駅に隣接する公開スタジオから放送し、小雨が降るなかでも足を止めて観覧する方々が多数いた。

番組で田中副院長は、同院や呼吸器センターの紹介に始まり、呼吸器疾患や低線量CT（コンピュータ断層撮影）による肺がん検診など解説。

「疾患の自己判断は難しいため、せきがなかなか止まらないなど少しでも心配なことがあれば、医療機関を受診していただくのが、よろしいと思います」とリスナーに呼びかけた。後半は、米国留学時代に始めたサックスや、本格的な野菜づくり・稲作など多彩かつアクティブな趣味の話題で盛り上がり、気さくな人柄がにじみ出るトークを披露。

「当初は6月に出演予定でしたが、緊急手術のため延期となり、ようやく出演がかないました。当院や呼吸器センターをひとりでも多くの方々に知っていただけたら、うれしいです」と振り返っている。